

[原著] 松本歯学 7: 95~103, 1981

歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究
第2報 松本歯科大学衛生学院生徒の人格検査

丸山寛子, 小林美樹, 清水みや子, 橋口緯徳

松本歯科大学衛生学院(学院長 橋口緯徳 教授)

A Methodological Study on Technical Aptitude Ability Survey in Dental Education
Second Report: Character test of students of
Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School

HIROKO MARUYAMA, MIKI KOBAYASHI, MIYAKO SHIMIZU, HIROYOSHI HASHIGUCHI

Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School

(Principal: Prof. H. Hashiguchi)

Summary

As the first step, California Psychological Inventory (CPI) was practiced on the students of the Dental Hygienist and Technician School. This was done as the occupation requires good human relationships and also as it often demands a trustworthy character. The matter of what test to apply as a character test is still in dispute, but in this case the CPI was adopted. The testees were students of Matsumoto Dental College, Dental Hygienist and Technician School. Details are as follows:

Dental Hygienist Class	1st grade	35
	2nd grade	29
Dental Technician Class	1st grade	22
	2nd grade	23
Teaching Staff		11
	Total	120

The test was practiced simultaneously and took one hour. Method: There were 480 items on the question card and testees were asked to answer yes or no on answer sheets. The items were divided into 4 groups, 18 standards and these combined totally, showed the testees' attitude and conduct tendency in human relationship.

The 4 groups survey the following items: Group 1 psychological stability, superiority, degree of selfreliance; Group 2 sociality, maturity, degree of responsibility; Group 3 achievement ability, intellectual ability; Group 4 intellectual pattern, interest pattern.

Grading method: There was a grading sheet for each of the 18 standards. Each

grading sheet was placed upon the answer sheet and the number of answers that fit into the grading sheet were written into grade list in each standard. These were separated into men and women profile sheets and each were converted into the grades of 18 standards according to the grade conversion table. The grades of each individual were made into graphs.

Using the standards of these graphs as a basis, the characteristics of each individual's conduct were surveyed according to the CPI 18 standards of the character tendency list and from here, the individual's total character was imagined.

The \bar{x} (average), σ (standard deviation) and C (coefficient of variation) of the class were statistically found out.

Design: In the results of Hygienist Class 2nd Grade, Flexibility (Fx) was the highest, followed by Socialization (So), Good Impression (Gi), Self-control (Sc), Achievement via Independence (Ai), Fertility (Fe), Communitary (Cm) showed the lowest value, followed by Capacity for Status (Cs), Achievement via Conformance (Ac). As for Hygienist Class 1st Grade, Fx was highest, followed by So, Ai, Fe, Cm was the lowest followed by Cs, Dominance (Do), Ac. In the case of Technician Class 2nd Grade, Fx was highest, followed by Fe, Gi, Cm was the lowest, followed by Sense of Well Being (Wb), Responsibility (Re), Cs. As in Technician Class 1st Grade, Fx was highest followed by Fe, Wb was lowest followed by Re, Intellectual Efficiency (Ie), Ac, Do, Cs. The Teaching Staff Men showed high values in Gi, Do, Psychological-mindedness (Py), low values in Cm and Re. Teaching Staff Women showed high values in Fx, Ai, So, Py and low values in Wb, Cm.

Altogether the Teaching Staff showed higher values than the students. The Teaching Staff possess a sensitive observation ability which students lack, and their characteristic is that they are sensitive in perceiving the feelings and inner desire of others.

Taking a perspective view, Fx showed high values and Cm low values. This indicates that they have a sharp insight, are self-confident, have humor, and are comparatively interested in individual pastimes and diversions. They have a tendency to be a little egoistic and arbitrary, are crafty to other, possess inner frustration, and their ideas are customary conventional and their vision a little limited. As for responsibility, diligence, honesty, sincerity, Hygienist Class and Teaching Staff showed higher values.

1. 緒 言

教育はある目的に応じて、ある人間を変革していくという一面を有している。歯科衛生士、歯科技工士の教育も歯科社会に適応する人間を造ることであり、また将来の歯科医学の発展に寄与することのできる人格を養成することにある。社会人であるためには専門知識や技術だけではなく、それ以前に一個の優れた人格を養成する必要がある。従って歯科医療に携わる者として歯科医師、歯科衛生士、歯科技工士などの医療技術能力に關する適性はいうに及ばず、人格形成の向上ということにおいても重要であると考えらるべきである。

古くから欧米においては入学時、入社時に人物の適性をみるために人格検査^{1) 2)}を行っている。最近日本においても多くの方式^{3) 4)}が考案され適用され一般化されつつある。

そこで我々は、先⁵⁾に衛生学院生徒の技術力、技能力等の予測として石膏四角柱の彫刻と、マッカーリーテスト改良法を生徒にほどこしてみた。その結果石膏彫刻において、訓練、努力、教育によって全体的に仕上げる力は向上するが、寸法的正確さはさほど向上しない傾向にあることがわかり、技術力と技能力のある部分において相関性を見出した。

今回はカリフォルニア人格検査を用いて衛生学

院歯科衛生士科(H), 歯科技工士科(T)の生徒109名と教職員(Z)11名を対象として検討してみた。

2. 方法

カリフォルニア人格検査^{1) 2)} (California Psychological Inventory) は普通略してCPIとよばれ、主として精神的医学的に疾患のない人々を対象として開発されたものであり、検査内容は人格の健全で積極的な側面を把握できるような特性によって構成されている。検査対象は松本歯科大学衛生学院歯科衛生士科1年生(H₁)35名, 2年生(H₂)29名, 歯科技工士科1年生(T₁)22名, 2年生(T₂)23名, Z女子(A)6名, Z男子(B)5名の計120名である。検査時間は生徒をいっせいに1時間内に解答をさせた。検査方法はカリフォルニア人格検査質問票の中に480の質問項目があり、その1問1問を解答用紙にその通り、ちがうのどちらかを答え記入していく。480の質問項目はカリフォルニア人格検査項目(表1)のように解釈を容易にするために、4つの大きな尺度群にま

表1: カリフォルニア人格検査項目

第1群 心的安定感, 優越性, 自信の程度を測定する。	
1. Do	支配性 指導能力, 支配性, 根拠強さ, 社会的先導力
2. Cs	社会的成就能力 社会的個人能力, 社会的技術
3. Sy	社交性 外向性, 社交性, 人づき合いの良さ
4. Sp	社会的安定感 対人関係における心的安定感, 自発性, 自信
5. Sa	自己満足感 対人関係における心的安定感, 自発性, 自信
6. Wb	幸福感 心身健康
第2群 社会化, 成熟性, 責任感の程度を測定する。	
1. Re	責任感 誠実さ, 責任感
2. So	社会的成熟性 社会的成熟, 誠実, 正直さ
3. Sc	自己統制力 自己規制, 自己統制力
4. To	寛容性 許容的・受容的・無批判的な社会的信念
5. Gi	自己顕示性 対人的自己関心度, 自己顕示欲
6. Cm	社会的常識性 この検査における集団に対しての共通性
第3群 成就能力と知的能力の程度を測定する。	
1. Ac	順応的な成就欲求 順応的成就に対する関心度, 欲求度
2. Ai	自立的な成就欲求 自立的成就に対する関心度, 要求度
3. Ie	知的能力 内的・知的能力
第4群 知的な型および興味様式を測定する。	
1. Py	共感性 対人的関心度, 感心性
2. Fx	融通性 社会的融通性・適応性
3. Fe	女性的傾向 女性的傾向, 男性的傾向

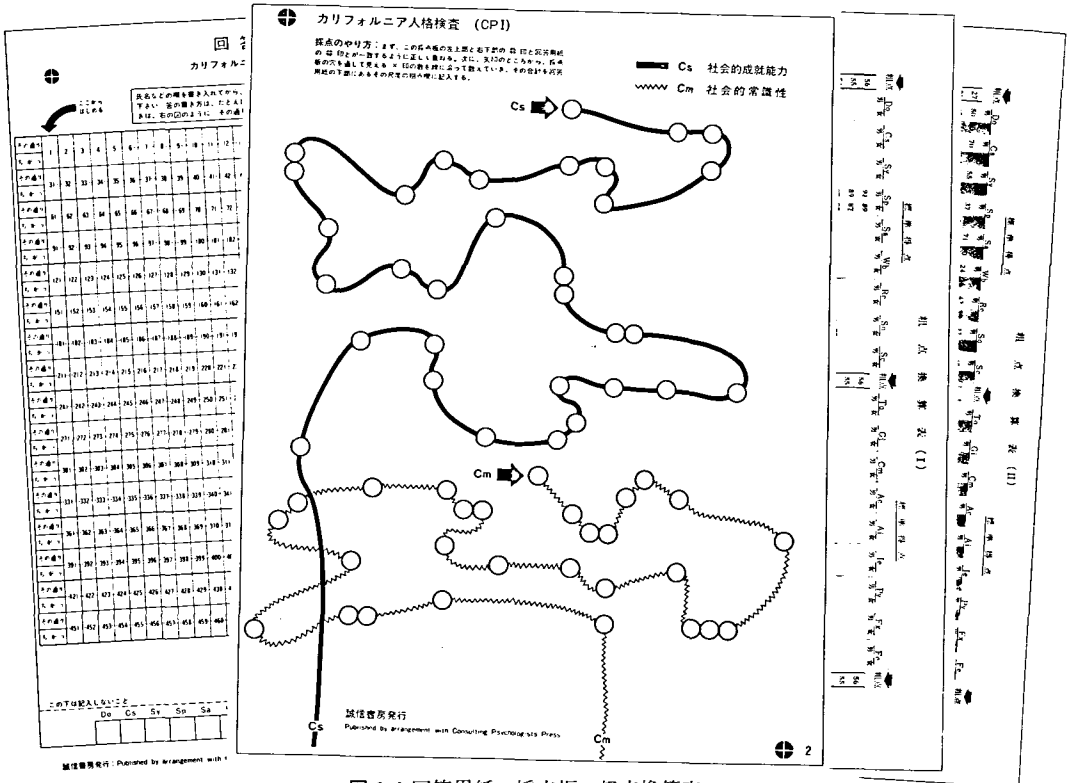


図1: 回答用紙, 採点板, 粗点換算表

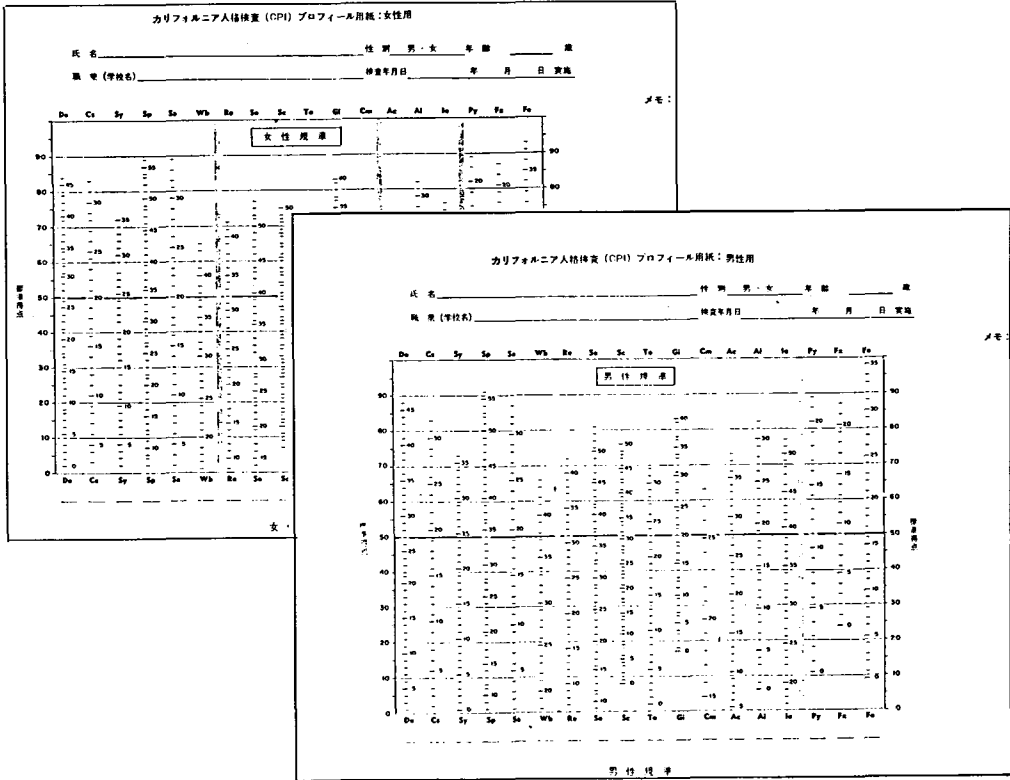


図2：CPIプロフィール用紙

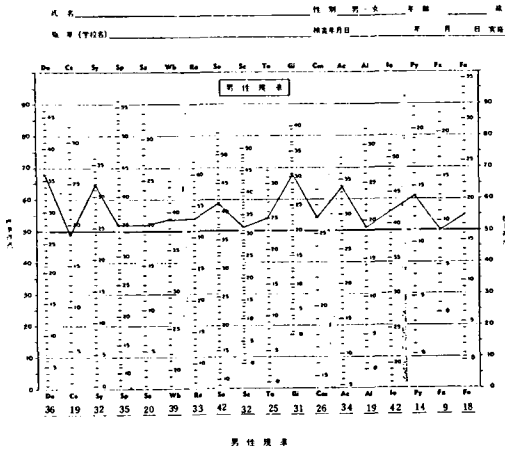


図3：カリフォルニア人格検査 (CPI) プロフィール用紙：男性用

とめられており、第1群は心的安定感、優越性、自信の程度を測定し、第2群は社会化、成熟性、責任感の程度を測定する。第3群は成就能力と知的能力の程度を測定し、第4群は知的な型および興味様式を測定する。なお解釈を容易にするために4つの大きな尺度群はさらに18の尺度に別れ、これら18の尺度を総合的に組み合わせると対人関係におけるその人の態度や、行動傾向を全体的に理解することができる。採点方法は18尺度の各々に採点板(図1)があり、それぞれの採点板の1枚1枚を回答用紙の上に重ね、○の中にあてはまる回答の数を尺度別の粗点欄に記入し、それを男性用、女性用のプロフィール用紙(図2)に18尺度の点数を粗点換算表(図1)により、それぞれ基準点に換算し個人の折線グラフ(図3)をつくり、その折線グラフの各々尺度の高低により行動特性をCPI 18尺度の人格傾向表によって知り、総合的な全体的な人間像を検査する。

今回はカリフォルニア人格検査をもちい各クラスの平均値(\bar{x})と標準偏差(σ)と変動係数(C)

を求め統計的に観察した。

3. 成績

① CPI の 1 群の \bar{x}

1 群においては H_1 では38 (Do) から43 (Sy) の間にあり、 \bar{x} は39.59であり、 H_2 においては36 (Cs) から43 (Sp) の間にあり、 \bar{x} は40.27であった。 H_1+H_2 は36 (Cs) から43 (Sp) (Sy) の間にあり、 \bar{x} は39.90であった。また T_1 においては34 (Wb) から47 (Sa) の間にあり、 \bar{x} は40.30であり、 T_2 においては36 (Wb) から49 (Sa) の間にあり、 \bar{x} は42.94であった。また T_1+T_2 は34 (Wb) から49 (Sa) の間にあり、 \bar{x} は41.65であった。 $H+T$ を全体的にみると34 (Wb) から49 (Sa) の間にあり、 \bar{x} は40.62であった。 Z においてはAは42 (Wb) から48 (Sp) の間にあり、 \bar{x} は45.60であり、Bにおいては52 (Sp) から64 (Do) の間にあり、 \bar{x} は55.50であり、 $A+B$ の全体においては42 (Wb) から64 (Do) の間にあり、 \bar{x} は50.92であった。

② CPI の 2 群の \bar{x}

2 群においては H_1 では24 (Cm) から51 (So) の間にあり、 \bar{x} は44.02であり、 H_2 においては33 (Cm) から51 (So) の間にあり、 \bar{x} は45.30であった。 H_1+H_2 は24 (Cm) から51 (So) の間にあり、 \bar{x} は44.60であった。また T_1 においては36 (Re) から46 (Sc) の間にあり、 \bar{x} は39.80であり、 T_2 においては35 (Cm) から50 (Gi) の間にあり、 \bar{x} は42.94であった。また T_1+T_2 は35 (Cm) から50 (Gi) の間にあり、 \bar{x} は41.42であった。 $H+T$ を全体的にみると24 (Cm) から51 (So) の間にあり、 \bar{x} は43.29であった。 Z においてはAは42 (Cm) から57 (So) の間にあり、 \bar{x} は47.62であり、Bにおいては45 (Cm) から67 (Gi) の間にあり、 \bar{x} は52.40であり、 $A+B$ の全体においては42 (Cm) から67 (Gi) の間にあり、 \bar{x} は50.22であった。

③ CPI の 3 群の \bar{x}

3 群においてはHでは38 (Ac) から50 (Ai) の間にあり、 \bar{x} は43.50であり、Tにおいては36 (Ie) から48 (Ai) の間にあり、 \bar{x} は42.31であった。 $H+T$ を全体的にみると36 (Ie) から50 (Ai) の間にあり、 \bar{x} は43.01であった。 Z においては47 (Ac) から58 (Ai) の間にあり、 \bar{x} は52.37であった。

④ CPI の 4 群の \bar{x}

表2：カリフォルニア人格検査の平均値と標準偏差および変動係数

(歯生学院生109名)

クラス別	項目	1 群	2 群	3 群	4 群	全 体
H_1 38名	\bar{x}	39.59	44.02	43.70	49.78	43.45
	σ	6.58	3.63	5.00	4.97	4.19
	c	0.17	0.13	0.11	0.10	0.10
H_2 29名	\bar{x}	40.27	45.30	43.29	51.30	44.43
	σ	8.27	8.23	6.71	4.39	5.26
	c	0.21	0.14	0.16	0.09	0.12
H_1+H_2 67名	\bar{x}	39.90	44.60	43.50	50.47	43.90
	σ	7.40	5.95	6.46	4.77	4.73
	c	0.19	0.13	0.15	0.09	0.11
T_1 22名	\bar{x}	40.30	39.80	39.90	52.50	42.94
	σ	7.43	8.55	7.62	5.37	5.92
	c	0.18	0.21	0.20	0.10	0.14
T_2 23名	\bar{x}	42.94	42.94	44.59	50.20	44.30
	σ	9.07	7.17	9.17	5.66	6.14
	c	0.21	0.17	0.21	0.11	0.14
T_1+T_2 45名	\bar{x}	41.65	41.42	42.31	50.84	43.16
	σ	8.41	8.03	8.77	5.56	6.13
	c	0.20	0.19	0.21	0.11	0.14
$H+T$ 109名	\bar{x}	40.62	43.29	43.01	50.62	43.59
	σ	7.89	7.06	7.52	5.11	5.37
	c	0.19	0.16	0.17	0.10	0.12

(歯生学院教職員 11名)

クラス別	項目	1 群	2 群	3 群	4 群	全 体
A 8名	\bar{x}	45.60	47.62	50.94	57.26	49.06
	σ	7.23	3.07	3.71	2.73	3.33
	c	0.16	0.06	0.07	0.05	0.07
B 6名	\bar{x}	55.50	52.40	53.60	56.90	54.35
	σ	3.91	6.24	7.67	6.97	3.23
	c	0.07	0.12	0.14	0.12	0.06
A+B 14名	\bar{x}	50.92	50.22	52.37	57.08	51.95
	σ	7.55	5.58	6.33	5.48	4.20
	c	0.15	0.11	0.12	0.10	0.08

標準偏差式 $\sigma = \sqrt{\frac{1}{n} \sum (x - \bar{x})^2}$

\bar{x} = 平均値
 σ = 標準偏差
 c = 変動係数

H_1 歯生士科1年
 H_2 歯生士科2年
 T_1 技工士科1年
 T_2 技工士科2年
 A 教職員(女子)
 B 教職員(男子)

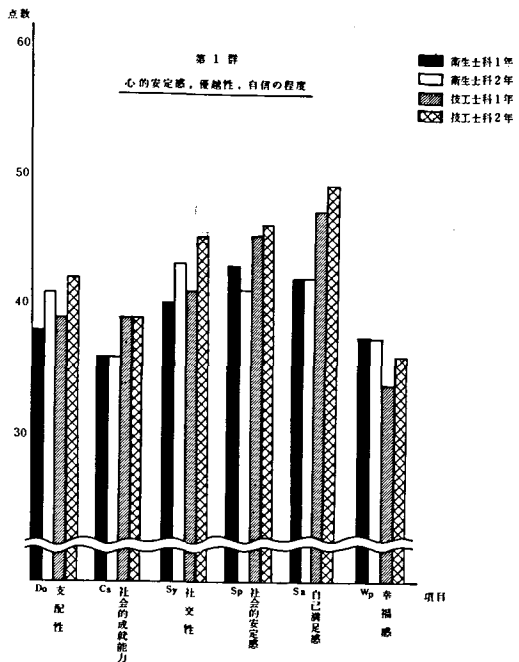


図4：クラス別比較(1)

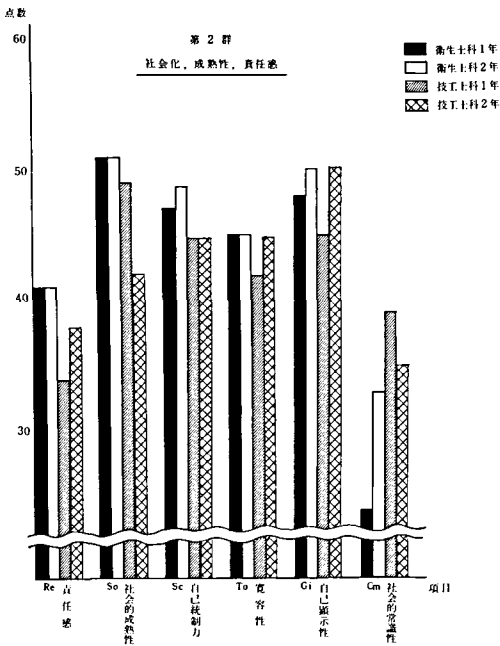


図5：クラス別比較（2）

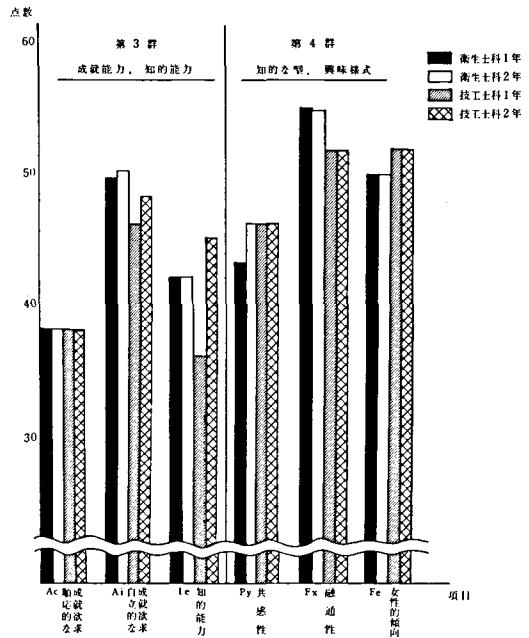


図6：クラス別比較（3）

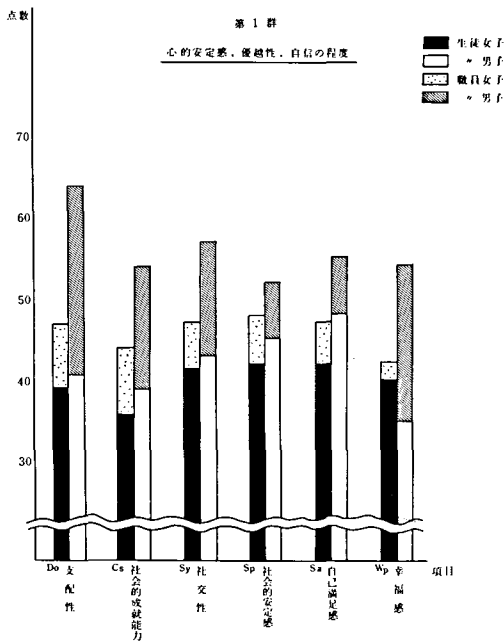


図7：生徒と教職員との比較（1）

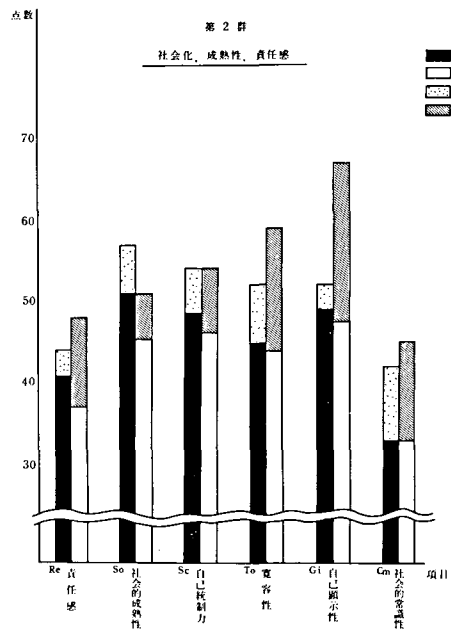


図8：生徒と教職員との比較（2）

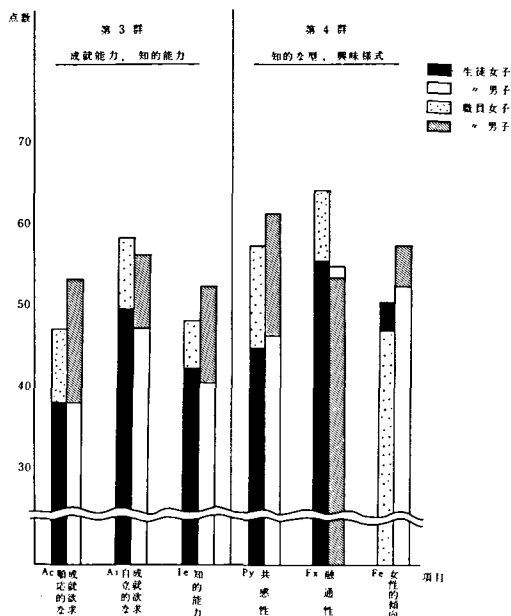


図9：生徒と教職員との比較（3）

4群においてはHでは43(Py)から56(Fx)の間にあり、 \bar{x} は50.47であり、Tにおいては46(Py)から53(Fx)の間にあり、 \bar{x} は50.84であった。H+Tを全体的にみると43(Py)から56(Fx)の間にあり、 \bar{x} は50.62であった。Zにおいては47(Fe)から64(Fx)の間にあり、 \bar{x} は57.08であった。

⑤ CPI の1群のσ

1群においてはH₁では3.2(Cs)から5.6(Sp)の間にあり、全体的σは6.58であり、H₂においては3.4(Cs)から6.1(Sp)の間にあり、全体的σは8.27であった。H₁+H₂は3.2(Cs)から6.1(Sp)の間にあり、全体的σは7.40であった。またT₁では3.4(Cs)から6.8(Sp)の間にあり、全体的σは7.43であり、T₂においては3.4(Cs)から6.4(Sp)(Wb)の間にあり、全体的σは9.07であった。またT₁+T₂は3.4(Cs)から6.8(Sp)の間にあり、全体的σは8.41であった。H+Tを全体的にみると3.2(Cs)から6.8(Sp)の間にあり、全体的σは7.89であった。ZにおいてはAは2.2(Sa)から6.5(Sp)の間にあり、全体的σは7.23であり、Bにおいては1.7(Sp)から4.6(Sy)の間にあり、全体的σは3.91であった。またA+Bの全体においては1.7(Sp)から6.5(Sp)の間にあり、全体的σは7.55であった。

⑥ CPI の2群のσ

2群においてはH₁では2.7(Cm)から5.8(Sc)の間にあり、全体的σは5.63であり、H₂においては1.8(Cm)から5.9(Gi)の間にあり、全体的σは6.23であった。H₁+H₂は1.8(Cm)から5.9(Gi)の間にあり、全体的σは5.95であった。またT₁では2.9(Cm)から7.8(So)の間にあり、全体的σは8.55であり、T₂においては2.2(Cm)から8.0(Sc)の間にあり、全体的σは7.17であった。T₁+T₂は2.2(Cm)から8.0(Sc)の間にあり、全体的σは8.03であった。H+Tを全体的にみると1.8(Cm)から8.0(Sc)の間にあり、全体的σは7.06であった。ZにおいてはAは1.2(So)から3.6(Gi)の間にあり、全体的σは3.07であり、Bにおいては1.5(To)から6.9(So)の間にあり、全体的σは6.24であった。A+Bの全体においては1.2(So)から6.9(So)の間にあり、全体的σは5.58であった。

⑦ CPI の3群のσ

3群においてはHは2.8(Ai)から4.8(Ac)の間にあり、全体的σは6.46であり、Tにおいては3.2(Ai)から5.5(Ac)の間にあり、全体的σは8.77であった。H+Tを全体的にみると2.8(Ai)から5.5(Ac)の間にあり、全体的σは7.52であった。Zにおいては2.5(Ac)から4.6(Ie)の間にあり、全体的σは6.33であった。

⑧ CPI の4群のσ

4群においてはHは2.2(Py)から3.9(Fx)の間にあり、全体的σは4.77であり、Tにおいては2.1(Py)から4.3(Fx)の間にあり、全体的σは5.56であった。H+Tを全体的にみると2.1(Py)から4.3(Fx)の間にあり、全体的σは5.11であった。Zにおいては1.4(Py)から4.4(Fx)の間にあり、全体的σは5.48であった。

4. 考 案

H₂においてはFxが最も高い値を示している。Fxというのは融通性と訳されており、個人の思考や社会的行動における融通性、適応性の程度を示している。この点数の高い場合の人格傾向は洞察が豊かであり、形成にとらわれず大胆で自信があり、ユーモラスなところもあり、理想主義的反面反抗的、独断的、利己主義的、皮肉で冷笑的で個人的な楽しみや気晴らしをするのに強い関心が

ある。この次に高いのは So であり Socialization つまり社会的成熟性が高いわけで、社会的誠実、正直度を示す。この点が高いというのは熱心、正直、勤勉、質素、親切、誠実、堅実、良心的で責任感があり、献身的で適応性があるというわけである。その次には Gi が高い値を示した。Gi は自己顕示性であり、好ましくない印象を創り出すことや他人が自分をどのように見ているかに関心をもっている程度を測定する。この値の高い人は協動的、冒険的、外向的、社交的、暖かく援助的であり人に良い印象を与えることに関心があり、勤勉で根気強い。その次は Sc でつまり自己統制力、自己規制がどの程度であるか、また衝動的、自己中心的傾向からどの程度脱皮しているかを示す。この値の高い人は落ち着いていて辛抱強く、实际的。活気がなく、自制的、抑制的、思索的、慎重で仕事への期待は自他ともに厳しく徹底的にし、正直で良心的である。その次は Ai で自立的な成就欲求である。自立することによって成就できるような場面でその成就を促進させる関心や要求がどの程度あるかを示す。その次は Fe でつまり女性的傾向に関心があり、この高い人は鑑賞眼があり、辛抱強く、援助的節度を守り、固執的、誠実、他人を尊敬し、受容的、良心的で同情的な生き方で振舞う。反面この学年の低いのは Cm であり、社会的常識性を示している。次に低いのが Cs の社会的成就能力で思考が紋切型。視野の関心が狭い。未知の社会的場面では憶病でうまくやれない。

H₁ は H₂ と同じように Fx が最も高く、So, Ai, Fe の順に高い。Ai は自立的な成就欲求度で、自主的、独立独行的、すぐれた知的能力と判断力をもっている。反面低いのは Cm, Cs, Do, Ac が低い。Do は支配性の測定で、この値の低いのは引込みがちで抑制的であり、平凡、無頓着、無口、控え目である。思考や行動が鈍重、緊張や決断を求められる場面を避け自信に欠けているという事になる。

T₂ は Fx が最も高く、Fe, Gi, 次に Sa, So が高い。Sa は自己満足度で、理知的、ずけずけ言う、鋭い機智に富み、攻撃的、自己中心的。説得力があり、話は流暢。自信をもっている。低いのは Cm, Wb の順であった。

T₁ は Fx が最も高く、次が Fe で、これに対し低いのは Wb, 次に Re である。この得点の低い

人は未成熟で、気むずかしく、怠惰、憶病、移り気で他人を信ぜず、個人的偏見、独断的、行動は統制を欠き、衝動的という事になる。次に低いのは Ie で用心深く、ろうばいし易く、安易で防禦的、野心がなく思考が紋切型。自己管理と自己訓練に欠ける。

A は Fx が最も高く、次に Ai, So, Py が高い。Py は共感性で他人の内的欲求や感情にどの程度関心があるかを示す。高い人は観察力が鋭く、自発的、敏速、敏感、話し好き、くふうに富み話が流暢で社会的に優位である。反面 Cm, Wb が最も低く、次に Cs が低い。

B は Gi, Do, Py, To が高く、これに対し Wb, Cm が最も低く、次に Re が低い値を示した。

この結果全体的特長を言えば Fx が最も高く、Cm が低いという事がわかった。それに Cs も低い傾向を示した。つまり洞察は豊かで自信がありユーモアもあるが、比較的個人的な楽しみや気晴らしに強い関心があり、利己的独的でやや対人的に陰険で内的葛藤をもち、慣習的で、温和、実直、思考が紋切型、視野と関心がやや狭いという事になる。

Z と生徒の比較では生徒に全くみられない。Py が Z には A B ともにあった。つまり Z は他人の内的欲求や感情に高い関心があり、A は他人の思わくを気にする傾向があり、協調的で良い印象を与える努力をするという数値が出ている。B と H は熱心、正直、勤勉、誠実、良心的で責任感があるという点では共通性がある。

5. 総 括

昭和55年度松本歯科大学衛生学院生徒と衛生学院教職員を対象として行った CPI について次のような結果が得られた。

まず初めに生徒における各群をクラス別に比較検討したところ表2にみられるように、1群においては T₂ が高い \bar{x} (42.94) を示し、C は T₂, H₂ が高くばらつきを示した。2群においては H₂ が高い \bar{x} (45.30) を示し、C は T₁ が高い値を示した。3群においては T₂ が高い \bar{x} (44.59) を示し、C は T₂ が高い値を示した。4群においては T₁ が高い \bar{x} (51.50) を示し、C は T₂ が少し高く、各クラス共低値を示した。全体の \bar{x} をみると H も T も2年生の方がわずかに高い数値を示し、H と T

ではHの方がわずかに高い数値を示した。CをみるとHよりもTの方が高い値を示し、HにおいてはH₁よりH₂の方が高い値を示し、ばらつき傾向が認められた。

次にZにおける各群のAB別の比較を検討してみたところ、同じく表2にみられるように1群、2群、3群ともBが高い \bar{x} を示し、4群だけはAが高い \bar{x} を示した。また生徒とZとの比較においてはZの方が高い数値を示した。

つづいてさらにくわしく18尺度の \bar{x} を各クラス別に比較検討してみたところ図4でみられるように、1群ではSaが全体的に高く、T₂、T₁の順に高い数値を示した。それとは反対にWbは全体的に低く、特にT₁が低い値を示した。2群では図5にみられるように、1群とは反対にほとんどの項目はHの方が高い数値を示したがCmはHが低く、特にH₁が低い数値を示した。3群は図6にみられるようにAcは低い値だが各クラスとも同じ数値を示し、IeはT₁が最も低い数値を示した。4群は同じく図6にみられるように各項目とも全体的に高い数値を示し、Fxは特にHが高い数値を示した。

試みとして生徒の男女とZのABを各項目別にxを比較してみたところ図7、図8、図9にみられるように、ほとんどの項目においてZが高い数値を示し、尚かつBが高い数値を示した。しかしFxにおいてはBよりもTの方が高い数値を示した。FeにおいてもAよりもHの方が高い数値を示した。DoとGiは特にBの方が高い数値を示し、So、FxはZ、生徒とも女子の方が高い数値を示した。

以上の事柄についてH、T、Z別にまとめてみると

①H₂はFxが最も高く、次にSo、Gi、Sc、Ai、Feが高く、Cmは最も低く、次にCs、Acが低い値を示した。

②H₁はFxが最も高く、次にSo、Ai、Feが高く、Cmは最も低く、次にCs、Do、Acが低い値を示した。

③T₂はFxが最も高く、次にFe、Giが高く、Cmは最も低く、次にWb、Re、Csが低い値を示した。

④T₁はFxが最も高く、次にFeが高く、Wbは最も低く、次にRe、Ie、Ac、Do、Csが低い値を示した。

⑤AはFxが最も高く、次にAi、So、Pyが高く、Wb、Cmが低い値を示した。BはGiが最も高く、次にDo、Pyが高く、Cmは最も低く、次にReが低い値を示した。

⑥H₂、H₁、T₂、T₁よりA、Bの方が全体的に高い値を示した。

⑦衛生学院生徒全体のCPIの各群においての得点範囲のばらつきをCを求めて比較してみると、表2にみられるように、1群は0.19、2群は0.16、3群は0.17、4群は0.10となり、4群が他よりも特にばらつきは少ない事がわかった。

以上の結果によりまとめてみると、生徒を主体とした全体的傾向は、4群が他群に比較して全般的に高い数値を示し、教職員では生徒と比較し、1群、2群、3群、4群ともに高い数値を示した。

今後私共は例数を増し、生徒の技能、技術力検査と平行して継続しながら比較検討していきたいと思う。

稿を終るに臨み、御協力をいただきました松本歯科大学衛生学院坂口賢司、谷内秀寿両講師をはじめ教職員諸氏に、また陶材センターの研究員各位に感謝の意を表します。

参 考 文 献

- 1) Gough, H. (1959) California Psychological Inventory, Consulting Psychologists Press, California.
- 2) 我妻洋, 川口茂雄, 白倉憲二 (1980) カリフォルニア人格検査・実施手引 (第3版), 誠信書房, 東京.
- 3) 内田勇三郎 (1962) 新適性検査法, 日刊工業新聞社刊, 東京.
- 4) 井村恒郎 (1971) 臨床心理検査法, 医学書院, 東京.
- 5) 橋口緯徳, 谷内秀寿, 坂口賢司 (1981) 歯科教育における技術適応能力診断の方法論的研究, 第1報 松本歯科大学衛生学院生徒の技術力, 技能力について, 日本歯科技工士学会誌2:45-51
- 6) 肥田野直, 瀬谷正敏, 大川信明 (1979) 心理教育統計学, 培風館, 東京.
- 7) 佐和隆光 (1979) 初等統計解析, 新曜社, 東京.
- 8) 牧野都治 (1974) 統計の知識, 森北出版株式会社, 東京.